

平成10年度夏期特別展

「相模国府とその世界」



構之内遺跡出土 「平」の銅印
(十世紀、平安時代)

万田八重窪横穴墓の調査が行われたのは、明治31年。この年が平塚市の考古学の出発点となります。。今年はちょうど百周年を迎えることになりました。その節目として、近年の成果を踏まえての「相模国府とその世界」をテーマとし、初期国府を、大住国府に視点を置きながら、相模国に展開された郡・郷の世界を垣間見るものです。

期 間：平成10年7月18日(土)から8月30日(日)まで

場 所：平塚市博物館・特別展示室

開館時間：9時から17時まで。ただし金曜日は19時まで

相模国府について (その1)

■国府とは何か

法律や刑罰を基本とした律令国家は政治の中心である宮都（平城京・平安京）を定め、地方には国府（今の県庁）・郡衙（今の市庁舎）を置き、地方支配の拠点としました。

■相模国府は何処にあったか

相模国（神奈川県の川崎市・横浜市を除いた地域）は八郡に分割されましたが、国府がどの郡に置かれたかは、現在の調査事例では分かっていません。国府の中心施設である国庁（今の議事堂）が発見されていないためです。そのために、多くの研究者によって、国府所在地の見解が分かれてきたのが現状かと思えます。

■相模国府三遷説とは

文献からの国府所在地は、大住国府（和名抄）と余綾国府（伊呂波字類抄）が分かっています。一方、考古学的には国分寺（一般的に国府の近傍に置かれている）が海老名市にあります。文献と国分寺の関係から、国府は移動したものと理解され、海老名市→平塚市→大磯町に移ったとする考え方が主流でした。

■大住国府は

大住国府（和名抄）はどこまで遡ることができるかが、大きな課題となります。この課題を紐解く材料として、墨書土器「国厨（くにのくりや）」「（くき）」や竪穴住居址や官衙鍛冶工房跡があります。次回、この点を紹介します。

（明石記）



▲七ノ域遺跡の長大な堀立柱建物跡

夏期特別展開連行事

◆特別展 記念講演会

日時：8月9日（日）午後1時から2時
場所：中央公民館小ホール
講師：山中敏史氏（奈良国立文化財研究所）
内容：「中央から見た相模国府」

◆シンポジウム「相模国府とその世界」

場所：中央公民館小ホール
日程：8月8日（土）・9日（日）の二日間
1日目：午後2時から午後5時
2日目：午前10時から4時

パネリスト：山中敏史（奈良国立文化財研究所）、
荒井健治（府中市教育委員会）、荒井秀規（藤沢市教育委員会）、河合英夫（榎玉川文化財研究所）、大上周三（神奈川県立埋蔵文化財センター）、田尾誠敏（東海大学）、
明石 新（平塚市博物館）

参加方法：記念講演会とも自由参加（定員：250名、但し資料代実費）

◆相模国府を歩く

日時：8月22日（土）午前10時から午後2時
集合場所：バス停「遺跡公園前」（平塚駅バス停1番線から平88城島經由伊勢原駅南口行き、
または平89～94で「中原御殿」下車、徒歩1分）

*参加自由です。



▲復元された平城京宮内省

平成10年度夏期特別展

「相模国府とその世界」

8月30日まで



先月の18日からの特別展は、大変好調な滑り出しとなっています。このテーマがいかに関心が高いものであるか実感しています。是非とも多くの皆様に見ていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

また、期間中には、特別展記念講演会、シンポジウムや「相模国府を歩く」見学会がありますので、大勢参加して下さいようお願い申し上げます。

相模国府について（その2）

大住国府はどこか

『和名抄』に記載された大住国府については、平塚八幡宮・四之宮説、伊勢原比々多・糟屋・東大竹説、秦野説と諸説入り乱れていましたが、昭和59年の平塚市四之宮下郷遺跡の調査成果とその後の調査から、9世紀代での平塚四之宮説は認められるようになりました。

初期国府海老名説と小田原説とは

大住国府以前の国府としての初期国府は、海老名説と小田原説の二つの考え方があります。

初期国府海老名説は『新編相模国風土記稿』に「国分寺の近傍にあるべし」を踏襲したもので、海老名国分寺の存在を根拠に展開してきました。国分寺は瓦の研究から国分寺建立の詔（741年）以後に創建され、780年頃には完成された説が有力になりました。しかし、国府が国分寺の近傍に置かれたとする説の弱点は考古学的な物的証拠が発見されていないことです。

一方、初期国府を小田原市の下曾我遺跡周辺とする見解もありますが、現在では足下郡衙とする考え方が有力です。また、足下郡衙（評家）は国府が完成するまでの仮の住まいとして利用されたとの考え方もありますが、その根拠となる考古学的な成果は見られません。

大住に移転した原因は、文献に記載された元慶二年（878）の大地震により、国衙（役所の施設）が大打撃を受けたことによるとの視点です。

大住国府は何処まで遡るか

『和名抄』の大住国府は四之宮説で終止符を打ったと考えますが、どこまで遡ることができるかです。この課題を紐解く資料として、平成元年・2年の稲荷前

A遺跡で墨書土器「国厨」が発見されました。「国厨」は国の台所機関である国厨家（食事の提供や食料・食器の調達・管理を主たる職務とする）を標記したものです。全国的な出土事例では、国府所在地や国府の出土機関からのものが多いのが特徴です。この遺跡では「国厨」が6点出土し、全国最多の出土点数となっていますので、この遺跡が相模国府の国厨家と判断することができます。

問題はこの墨書土器の年代観です。土器の編年から見ると8世紀第 四半期に相当します。この年代には大きな意味を持ちます。と言いますのは、従来の大住への移転への論点は元慶二年（878）です。約百年のギャップが生じ、つじつまが合わなくなります。つまり、従来の見解では理解することができないこととなります。文献に記載された国分寺火災・倒壊の資料を引用して、無理に大住への移転を想定したものと考えます。

『和名抄』の「大住国府」は生きている

「国厨」墨書だけではなく、稲荷前A遺跡第3地点から「𩇑」（くき）の墨書が出土しました。𩇑（一種の調味料で海藻と大豆で製造、また医薬品としても用いられた）は平城木簡でも確認され、文献にも相模国の特産物として中央に運ばれています。𩇑が製造された所は国厨家か郡厨家かわかりませんが、管理は国厨家が把握していたものと思います。「𩇑」墨書土器が出土した掘立柱建物跡の年代は8世紀中葉と考えています。この時期に四之宮に国厨家が存在していたことは、初期国府も当然四之宮にあったと考え、『和名抄』の大住国府はそのまま生きているものと考えます。

夏期特別展関連行事

特別展 記念講演会

日 時：8月9日（日）午後1時から2時
場 所：中央公民館小ホール
講 師：山中敏史氏（奈良国立文化財研究所）
内 容：「中央から見た相模国府」

シンポジウム「相模国府とその世界」

場 所：中央公民館小ホール
日 程：8月8日（土）・9日（日）の二日間
1日目：午後2時から午後5時
2日目：午前10時から4時
パ ー ト ナ ー：山中敏史（奈良国立文化財研究所）
荒井健治（府中市教育委員会）、荒井秀規（藤

沢市教育委員会）、河合英夫（榊玉川文化財研究所）、大上周三（神奈川県立埋蔵文化財センター）、田尾誠敏（東海大学）、明石 新（平塚市博物館）
参加方法：記念講演会とも自由参加（定員：250名、但し資料代実費）

相模国府を歩く

日 時：8月22日（土）午前10時から午後2時
集合場所：バス停「遺跡公園前」（平塚駅バス停1番線から平88城島経由伊勢原駅南口行き、または平80～94で「中原御殿」下車、徒歩1分）
*参加自由です。